

食べるよろこび・生きる力

筑波大学名誉教授

紙屋克子

意識障害は、脳性の一時障害だけでなく、循環器・呼吸器系疾患や代謝障害、各種の中毒症など、さまざまな原因によって生じます。原疾患に対する積極的な治療にもかかわらず、意識障害が遷延化した場合の治療と看護は、いまだ確立をみていません。とりわけ、医学的に「意識の回復は困難である」と判断された患者については、看護活動も生命維持や身体機能の調整といった消極的なものになりがちでした。

しかし最近、口腔領域をはじめとして、日常生活ケアを健康時と同じ方法でくり返し提供することが、習慣として確立した生活行動を再生・獲得される有効な機会となり、意識の回復を促進することが臨床的に実証されてきました。

人は生きるために体外から経口的に食物を取り入れ、体内で消化・吸収し、生命を維持しています。古くは口から食べることができなくなれば、それは即、死を意味していました。しかし、近年の医学進歩にともない、口から食べられなくても、経管栄養で生命を維持することが可能になった反面、この処置は医学的には簡便であり、口から食べられる機能を残している患者に対しても安易に行うという弊害も生まれています。

意識障害の患者にとっての経口摂取は、ベンフィールドらによる研究成果からも明らかなように、味覚・咀嚼に代表される口腔領域が刺激の投射領域としても脳の広い部分を占めるため、ここから入る刺激は脳の精神活動を賦活し、意識回復の可能性を飛躍的に高めると考えられています。

意識障害患者は、看護訓練なしに、生活行動を再獲得することは決してありえず、この看護の実現のためには、長期にわたる根気強い働きかけと厳密な計画・観察が必要であるところから、多忙な看護の現場では敬遠されることも事実です。

しかし、「口から食べる」ということは、家族が患者を一人の人間として、また家族の一員として、その存在を確認することのできる最もわかりやすく、歡びにつながる生活行為の一つです。さらに、経口摂取の確立に取り組むことは、結果としてそれが成功にいたることがなくても、看護者にとっては家族の精神的支援の一つとして、また、遷延性意識障害患者の生命や生活の質を問う、QOLの思想にかなうものとして重要な意義があります。意識障害看護の経験を通して口腔ケアと経口摂取が意識回復過程に及ぼす効果について、臨床看護の立場から紹介します。

2008年6月現在

紙屋克子プロフィール

現職 筑波大学 名誉教授 (医学博士)

略歴

1968年 北海道大学 医学部附属看護学校卒業
～79年 北海道大学医学部附属病院で11年間、臨床看護を経験(脳神経外科・精神神経科)
1984年 北星学園大学文学部 社会福祉学科卒業
1990年 北海学園大学法学部 法律学科卒業
1994年 同大学 大学院修士課程(法学:医事法・インフォームドコンセント)修了
1985年 医療法人札幌麻生脳神経外科病院 看護部長、副院長
1995年 6月 筑波大学 医科学研究科教授 社会医学系
2000年 筑波大学 人間総合科学研究科教授 (ヒューマン・ケア科学専攻)
2004年 看護・医療科学類長(2006年まで)
2008年 筑波大学 名誉教授

著書

「私の看護ノート」	医学書院, (録音図書:愛知県図書館)
「看護とはどんな仕事か」7人のトップランナーたち	勁草書房(教育選定図書)
「私たちの看護管理実践」	紙屋克子, 住吉蝶子 医学書院(共著) (プロビデンス病院と札幌麻生病院の看護管理)
「Quality of Life」-医療新次元の創造-	日野原重明監修 メディカルレビュー社(共著)
「生・老・病・死を考える15章」実践・臨床人間学入門	朝日新聞社(共著)
「基礎看護学-実践看護技術学習支援テキスト」	日本看護協会出版会(分担執筆)
「自立のための生活支援技術」	中央法規出版(教育ビデオ全3巻2002年)
「いま、看護を問う」	新日本医学出版社(共著)
「看護の心そして技術」NHK・課外授業「ようこそ先輩」から	KTC中央出版
「ナーシングバイオメカニクスに基づく自立のための生活支援技術」	ナーシングサイエンスアカデミー
「看護の実践と科学」	メヂカルフレンド社(共著)

一貫して意識障害患者の看護の実践と研究に取り組み、1991年日本看護研究学会において意識障害患者を「重複生活行動障害者」と看護学的に規定することを提唱。

1992年、NHKスペシャル・ドキュメンタリー「あなたの声が聞きたい-植物人間・生還への挑戦-」で紹介された看護活動は、医療・看護界のみならず広く一般の人々にも看護の成果と素晴らしさを伝えたことで注目された。

平成5年度 意識障害患者に関する看護活動の功績により、第27回吉川英治文化賞受賞

平成18年度 「ケア付き青森ねぶた」活動により、内閣府バリアフリー化推進功労者賞受賞

(医学書院・著者紹介より)